

序

奈良盆地の北方に控え京都府と奈良県にまたがる奈良山丘陵は、1970年代に日本住宅公団による大規模なニュータウン計画がもちあがり、それに先立つ発掘調査が奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部に依頼されました。試掘調査・本格調査をへて、瓦窯や工房を中心とした生産遺跡をはじめ、平城京と密接に関連する重要な遺跡がみつかりました。しかし、調査した遺跡は生産遺跡にとどまらず、古墳時代以後の各時代の遺跡があります。それらの調査記録はいずれも貴重なものでありますが、本報告書ではそのうち古墳に関するものを選んで報告することにしました。

なかでも国指定史跡「石のカラト古墳」は、飛鳥時代から奈良時代初めに築造された終末期古墳と呼ばれるもので、今日、壁画の保存に対して当文化財研究所が鋭意取り組んでおります奈良県明日香村の高松塚古墳とキトラ古墳によく似た構造をもつ類例のきわめて限られた古墳です。この古墳に対して実施された発掘調査の成果は、考古学や歴史の研究に留まらず両壁画古墳の保存についても有効な参照データを提示できる今日的課題を背負ったものと言えます。特殊な上円下方墳というその墳丘形態についても近年ようやく類例が増加し、この方面からも調査成果の詳細な報告が要望されているところでした。本書はこれらに対して少なからぬ寄与を果たすものと確信しております。

また、石のカラト古墳の次に扱いました音乗谷古墳は、出土した埴輪の検討作業により、これまで低調と見られてきた古墳時代後期の畿内の埴輪を見直す必要を迫る多彩な形象埴輪群をもっていたことが明らかになりました。横坐りの馬をはじめ、東国独自の発展と評価されがちな6世紀代の埴輪が実は畿内に対比資料が存在していることを示すことができました。

奈良文化財研究所では日々の発掘調査とともに、こうした過去の調査成果の新たな見直しも絶えず続けていく努力を続けております。今後も、同様な作業により新たな発見や考え方の修正が迫られることもあるでしょうが、過去の成果を十分に受け止め、今日の調査に臨む姿勢を忘れてはならないと思います。本書がその主旨に少しでもかなうものとなれば幸いです。

最後に調査以来、各種の便宜をはかっていただいた京都府・奈良県両教育委員会をはじめ、発掘・資料整理など各方面でご援助いただいた関係の皆様方に厚くお礼申しあげます。

平成17年3月

独立行政法人文化財研究所
奈良文化財研究所
所長 町田 章